

## 大正思想史の諸問題——関心の所在——

平石 直昭

二〇〇二年度の日本思想史学会の大会シンポジウムは「大正思想史の諸問題」と題して東北大学で行われた。このテーマを大会委員会に提案した者として、この問題に対する私の関心の一端を書かせていただくことにする。

今から半世紀以上前になるが、座談会「日本の運命——興廢の岐路」（『世界』一九五〇年三月号）で大内兵衛は、近代日本の歴史を回顧して「日本ほど急速に勃興した国もなければ日本ほど急速に没落した国もない」という趣旨を述べている。これをうけて出席者中ただ一人の「大正ツ子」という丸山眞男は、「過去半世紀の日本の歴史的な解明は結局この謎をどう解くかという問題に帰着する」「あんな素晴しかった日本を後の奴がめっちゃめちゃにしてしまったという感じと、そんなめっちゃめっちゃになるような「素晴しさ」はもう真っ平だ」と感じ、との間には大分ズレがあり、それが学問の世界でも、例えば老大家と若い歴史家との間の問題意識のちがいでして現われてきている」（『丸山眞男座談』二卷一三八頁）。

ここで丸山がふれているのは、津田左右吉と彼自身との間にあったような明治大正の評価をめぐる違いであ

る。敗戦の翌年発表された丸山の「超国家主義の論理と心理」は、国民を戦争へと駆りたてた超国家主義の精神を分析して大きな反響をよんだ。日本では「教育勅語」が示すように、国家が「国体」という形で倫理価値を決定し国民の内面にも干渉した。このため政教分離や公私分離の原則が確立せず、権力と倫理の間の相互浸透や、私利の追求を公共奉仕によって正当化する自己欺瞞が発生したというのである。

この議論で特徴的なのは、超国家主義の問題を明治後半以後の近代全体に関わるものとして捉え、昭和に特異な現象とは見ないことである。「老大家」が批判した一つはこの点であった。それは彼らに、明治をよく知らぬ丸山のような若い者が、昭和の体験を過去に投影したものと映ったのである（津田「明治維新史の取扱ひについて」『世界』一九四七年一〇月号を参照）。

同じ座談会で丸山が「日本帝国の崩壊」について「昭和になって急に横合から軍部という乱暴者が出てきてせつかくの先代の苦心の経営を台なしにしてしまったという風に理解せずに、これをどこまでも明治時代内に在っていた契機の顕在化として把握しなければならぬ」「日本の興隆と没落、成功と過誤とをどこまでも一つの問題として捉えて行くことが必要」と強調しているのは、こうした津田的な批判に対する応答であった（同右『座談』二四〇頁）。

ところで丸山は同じ時期に「社会思想五十年」という短文を書いている。一九五〇年という節目の年に、世紀前半の日本を総括するべく企画された、『二十世紀日本文学史』の一卷に予定されていた本の趣旨説明である。そこで彼は「大正以後の歴史は私自身の知識でも一番ブランクな領域」であり、どんなものが出来るか見当がつかないと認めながら「過去五十年の日本の歩みというものは、華々しい帝國的興隆から、その慌だしい没落と民主革命の陣痛に至るまで、その転換の急激さと劇的起伏において、後世、おそらく世界の歴史家が最も食指を動かすテーマとなる」と述べ、同時代に生きた歴史家の自分がこれについて書き残さなければ、「学的懶惰と無責任を糾弾されても仕方がない」とまで記している（五〇年五月、『丸山眞男集』一六卷二二二頁）。これが右の座談会での発言をうけていることは明らかである。

だが本書は、担当の編集者がレッドパーズで解雇され、丸山がそれへの抗議として執筆準備を中止したとい

う事情もあって、結局、書かれずに終わった。これに先だって彼は、「明治国家の思想」など、明治の思想史を主題とした一連の論文を発表している（『集』三、四巻所収）。もし書かれていれば本書は、それらとあいまって、丸山の近代日本思想史の全体像を示す大きな業績となったであろう。その意味で本書が書かれなかったことは非常に残念である。

しかし逆にいえばこのことは、上記のような問題関心をもって近代日本の思想史を捉える課題が、後世に遺されたことを意味するであろう。とくに明治と昭和の間に介在する大正期の思想史は、「明治時代に内在していた契機」がいかに顕在化してゆくかを跡付け、また「成功と過誤」がどんな仕方で表裏一体の関係にあったかを分析する上で、重要な位置を占めるはずである。そして丸山の論文のうち「近代日本思想史における国家理性の問題」（四九年一月）や「近代日本における思想史的方法の形成」（六一年一月）が未完であるのは、このこととどこかで関係しているように思われる。

むろん当時から五十年以上を経過する間に、資料面でも分析面でも、大正思想史の研究は大きく進んだ。しかし個別研究が厚い層をなす反面で、その全体像はかえって捉えにくくなっているような状況があるのではないだろうか。そこでこのシンポジウムでは、三人の専門家に違った切り口から接近して頂き、基本的な対抗軸を明らかにすることで、全体像に迫ることを目指したわけである。

（東京大学教授）